

「かびたんもつくばはせけり君が春」と松尾芭蕉が歌ったのは西暦1678年。反対に欧州では、モンタヌスやケンプファーらによって、日本に関する情報が公開される。長崎の出島を小さな窓とした日蘭文化交流史には、一方から他方への情報の搾取とは異なった双方向性が宿っている。世界的に見ても、ゴアやバタヴィア、マカオと並んで、ここには異文化交流の現場検証のための貴重な素材が集約している。交流400周年を迎えて、従来の蘭学研究の枠を破って、その実態に迫る会合が持たれた(国際日本文化研究センター、11月19-21日)。

蘭学の領域でも新発見が目白押し。医学史の領域では、Wolfgang Michel氏が日本における紅毛医学の導入におけるドイツ外科医Casper Schambergerの意義に照明。勝盛典子氏は、石川大浪(1765-1817)の『獅子図』から歌川国芳(1797-1861)の『近江の国の勇婦於兼』、『四十七士討ち入り図』などが、舶来のインク物語の挿絵を利用していることを指摘(となれば伊藤若冲の『禽獣果樹花卉図屏風』の正面向きの象もあるいは同じ種か?)。松田清氏は、平戸藩主、松浦静山(1760-1841)旧蔵図書に、ヴォルテールの『オルレアンの処女』の挿絵が、「荷蘭陀春画」として所蔵されていたことを発表。また『バタビア暦和解』が欧州の歴史編年を日本人が知るうえで果たした役割を強調。吉田忠氏は司馬江漢(1747-1818)の星座図の背後に稲垣Sadayoshiほか、本多利明周辺の、今日なおよく知られていない蘭学者たちの介在したことを立証。Cynthia Vialleは漆器が贈答品として欧州に流通した様子を具体的に復元。トイレ普及以前の欧州邸宅での「おまる」用途の椅子にも、日本漆器が利用されていた。

日蘭交渉の舞台に立った人物群像も、さらなる探求に値する。Leonard Blusséは將軍拜謁での横柄な態度が悶着を起こした問題児、Piter Nuyts(1598-1655)の自己陥穽の著、『象を称えて』に、外国に興味を示さず、希羅の古典に埋没した不順応一植民者の姿を活写。またSusan Legêneは出島館長Jan Cock Blomhoffとその義兄弟、Gaspar van Breugelを巡る精査を基に、長崎とスリナムの場合を比較した。文化間の狭間にたって媒介者となる存在、とりわけ、女性旅行者(イザベラ・バード、A. ダヴィッド・ニール等)や入植者子女の養育に当たった現地女性の役割。シーボルトの

連載⑤
文化摩擦の功罪
交流四百年記念日蘭交流史研究ワークショップから

滝からハーンの節子に至り、『蝶々夫人』を生む系譜を、女性主体の側から体系的に再評価する必要もある。また元来の文脈では「玩具」に過ぎない人形が、本国の博物館では「人種標本」として読み直される視線の政治学等の観点から刺激的。また上林好之氏が、建築家G.A.Escherとも交流のあった河川土木技師J.de Rijke(1842-1913)の足跡と、淀川、木曾川から上海に至る、彼の手になる護岸工事の詳細を逐一図解した。

これとも密接に結び付くのが文化翻訳の問題だ。塚原東吾氏が宇田川榕菴(1798-1847)による『菩多尼詞経』といった標題の選択に見られる、科学移植と文化抵抗=文化受容。永積洋子氏がケンプファー訳での志築忠雄の「鎖国」概念案出を始め、19世紀蘭書の日本への移入。Jan BankがVan Goghの場合に見られる芸術上の文化翻訳。F.B.Verwayenがこれまた榕菴らによるオランダ民法や刑法の日本語への翻訳の実態を分析。異なるパラダイム間のインターフェイスの問題は、科学史理論上の机上論争のみならず、現場からの問い直しを要する。

最後に重要な課題として取り上げられたのが、植民地経営から日本敗戦、さらには今日に至る戦争の記憶の問題だ。Elly Touwen-Bousmaによる研究史概観に続き、白石隆氏がスハルト治世下の警察権力が、オランダ治世からは精神的圧迫、日本憲兵隊からは肉体的暴行、という両者を継承した、とする説を展開。今日の混乱を、植民地支配の負の遺産が時限爆弾となったものと解釈。全体まとめとしては、L.C.Blomが、戦勝50周年式典で、謝罪や祈禱そのものが許されなかった、日本人神父の立場のなさか話題にされた。賠償の論理の外部をなす絶対の悪。その具現たる「他者」の役割が、日本に宛てがわれる。原爆投下が日本軍捕虜を救った、とする公衆の集約の記憶を操作する情報政治学も検討された。Laurens van der Post原作、大島渚監督の『戦場のメリークリスマス』でのヨノイ中佐の発言、「ジュネーブ協定など我々には関係ない」の意味を問うた中尾知代氏の質問は、大切な。『世紀の遺書』に集められたB-C級戦犯死刑者の多くは、法廷で自らの責任も認めず、また一少数のキリスト者を例外として一自己弁護も放棄した。異文化衝突の現場への更なる倫理的問いかけが待っている。

国際日本文化研究センター研究員・総合研究大学院大学助教 稲賀繁美

思

考

の

隅

景